

「編集手帳」読売新聞 2009年1月17日朝刊を読む

プロフェッショナルとは

- 1 . 将棋の大山康晴 15 世名人は語ったという。<得意の手があるようじゃ、素人です。玄人に得意の手はありません。>融通無碍、臨機応変こそがプロの証しであると。永六輔さんの「役者 その世界」(岩波書店)に収められている。
- 2 . 両翼のエンジンが故障した旅客機に、管制官は最寄りの空港に着陸するよう指示したという。間に合わないと判断した機長は着陸という「得意の手」を捨てて着水を選び、人口密集地に墜落する惨事を間一髪で避けた。
- 3 . 米国ニューヨーク市のハドソン川に US エアウェイズ機が不時着し、155 人の乗客・乗員がひとりの犠牲者もなく救出される様子をテレビの映像で眺めつつ、これぞ玄人、プロの仕事に、胃の痛くなるような緊張が身を去らない。
- 4 . 全員が脱出したあと、チェスレイ・サレンバーガー機長(58)はいつ川底に沈むかも知れぬ機内に残り、2 度にわたって通路をくまなく行き来して乗客が残っていないことを確認している。

[コメント]

仕事とは何か、何のために生きるのか、何のために学ぶのか、仕事を通して人々のお役に立つとは何か、今何をせねばならないのかを考えるヒントが、155 名の人命を救ったパイロットの活躍を描いた読売新聞のコラム「編集手帳」のこの文章にはある。何十回も声を出して読んでしまった。

- 2009年1月18日林明夫記 -